

# プラトン『メノン』篇の逐一研究（一）

水\* 崎 博 明

## 一

本学において「知の理論」なる講義を講ずるのに右のプラトン『メノン』篇をその素材として取り扱ってゐる以上、『メノン』篇がそのすべてに渡って可能な限り平明かつ明晰に講じられねばならぬことは無論のことである。それ故、講義の責めを負ふ筆者として如何なる細部をも厭ふことなく筆者にとって納得の行く形で理解することに、先づ逐一ここに努めたい。

(1)

最初には何が問題であるか。対話人物メノンその人の冒頭の端的な問い、すなはち「徳」(アレテー)といふもの人間存在にとっての備はり方を問ふた問いが、さうした問いよりも何よりもそもそも「徳」とは何であるのかとの問いによって先行されねばならないのではないかとソクラテスによって問い直されて、その形の問いこそが問はれることとなった。しかしその形での問いも行き詰まった時、メノンその人がまた知らぬものの探求とはおよそあり得ることなのかといふ仕方でもソクラテスのその問い直しの持つべき意義そのものを逆に問ふことともなった。この一連の思考の意味こそがそれとなることは、ほぼ明らかなることであらうか。何故なら、およそソクラテスは先決問題といふものの存在を主張したのであったが、その主張そのものの有効無効の如何といふそのこと自身が問はれるにも至ったといふことだから、それはまさにおよそ何が先決問題なのかといふことをこそ争ふ一連の問答だと考へられようからである。従って、我々としてはソクラテスがどういふ意味で「徳とは何か」といふ問いこそが先決問題であるとするのか。メノンのさういふ先決問題としての問題の解決努力が導いた導きとは要するに彼その人には探求のアポリアをこそ語らしめるものなのだとする時、そこにはどれだけの理由があると考へられるのか。そしてメノンにはその理由とされるものもソクラテスには「想起の説」によって十分に克服され得るものであり、それ故やはり先決問題は依然先決問題たらんとするか。これら三つの問いを先づは問ふて行くことともなるだらう。順に問いの一・二・三とする。

「徳とはどのやうであるか」といふ問ひよりは「徳とはそもそも何であるのか」といふ問ひこそが先決問題なのだ  
とソクラテスはなす（問ひの一）。それは

だが、それを私は何であるとは知らぬといったものをどういった仕方でどのやうな何かであると私は知ること  
だらう。それとも君には出来ると思はれるだらうか、誰にもせよメノンその人を全くもってそれが誰であるかと  
知らぬところのその人が、彼が美しいかどうか、金持ちであるかどうか、その生まれに適ふ人であるかどうか、  
それともそれらの反対であるかどうかを。(71b3-7)

といった問ひの形で問はれてゐるものであるが、恐らく誰しもこの問ひに対しては否定の答へをこそ答へて、それで  
よしとすることだらう。事柄にはものの順序といふものがあり、或ることをそのことについて後から知って行くの  
も先づはそのことがそのこととして知られた上でのことであるとおよそ我々の心得てゐることとも考へられようか  
ら。すなはち、同じく「知る」ことと言ってもそれは「初めてそれを知る」ことと「後からそれについて知る」こと  
とのその区別があるといふ仕方でこそ行はれてゐるのではないかといふことである。この間の事情は、恐らくは、或  
いは平凡な常識だ、およそ自明である、とされてよいことであるのかも知れない。しかしながら、他ならぬその「初

めてそれを知る」といふことが「後からそれについて知る」といふことから区別されるのだといふその区別といふものも所詮は「初めてそれを知る」といふそのこと自身の成立を待ってこそのことであるとするとするならば、それはそもそも成立するのかわいふ問ひがあつてもその問ひに対して肯定的に答へ得るものでこそあるのでなければならぬ。だがその最初の試みは行き詰まり、あたかも「メノンといふ人は誰ですか」といふ「初めてそれを知る」といふ形での問ひも「メノン」といふことだったら回答し得るのにそれが「徳」なら最早不可能事でもあるかのやうに問答は問答し、遂に「知らぬものは探求不可能」「知らぬものは探求不用」といふ言説をメノンその人が思ふに至つてしまふといふこともなるのだった。いったい、何故「初めてそれを知る」といふことは「メノン」その人に関してでは可能であるといふのに「徳」に関してではあたかも不可能事でもあるかのやうであるのか。我々は先づは「初めてそれを知る」といふこと、そのこと自身をよく考へておくことが求められるのだらうか。

## 四

「初めてそれを知る」といふことと「後からそれについて知る」といふこととを初歩的にかつ端的に考へておかう。それぞれは思ふに前者は例へば「私がメノンです」と変な自己紹介をされこれからさう承知しようとする場合であり、後者は例へば「私はメノンと申しますが、あの薔薇の花瓶の前に立ってゐる女の兄です」といったやうな自己紹介に続く言葉聞いた場合だと言ふことが出来るであらうか。前者の場合「私が」と言はれて見てもそれは「私がメノン

です」といふその名乗りで名乗られたその「メノン」なる存在が帰属すべきものであるとはこの今には承知するとはしてもそれまでは全く未知であったものであり、従って、その未知の資格ではあるがしかし「メノンなのだ」といふその名乗りには条件を握る者なのだといふことがあって、そこで名乗りが名乗られて人々がそれを受け入れるといふことがそこでは行はれるのだと言へようか。そしてその要点とは、条件を満たすものは条件として満たしてゐるその限りではその条件下で語られるべき事柄を語り出してもよいのだといふことだと言へるだらうか。その間の事情とはあたかも「九々の声」にも似たものであって「二二が」とは「四」であると名乗ることが出来、またさう語られる。

「二三が」とは「六」であると名乗ることが出来、またさうも語られる。条件を握るものはただその限りで、それがその条件ともなつてゐるその事柄を事柄ともなし得、事柄を語り得るのだといふことである。そしてこのことは、与条件の承認とその許可とによる語りが行くその今にこそ「初めてそれを知る」ことを我々に叶へるのだとの謂ひであるとも言ひ続けることが出来るだらう。つまり、それを語り出されることの条件だと承認するまではそこに語り出されるべきことは未知であったが、それを語り出されることの条件なのだと認めるに至るや否や、その上でその語りを今初めてそれと我々に知らしめるのだといふことである。それは例へば端的に、「二二」が条件ともなつて「二二が四」を初めて知らしめるが如くにである。これを右の我々の例に即して見れば、「私がメノンです」と名乗られた者はその名乗るだけの条件をさう名乗る「私」において承認するならば、まさしくその条件の承認からこそメノンその人を初めて知るに至るのだといふことである。すなはち、「メノン」を未知であるとは先づはメノン

その人を語らしめるその条件と没交渉であった時のことであり次いでは交渉を持つに至ってもその条件を承認しない時のことだといふことである。<sup>②</sup>要するに、条件の条件としての不成立こそが我々の未知をそこにもたらすものなのであり、条件の条件としてのその成立こそが、さうした未知をも破ってその成立の今に初めて知をもたらすのだといふことである。

後者はどうであらうか。「私は」といふ限りその「私」とはそれが誰でありどのやうにあるのかが答へられるべきその問いがかかるその問ひないし主題として提示され、回答がそれにこそ掛かるべきものとしてさう提示されてゐるのだといふまさにその意味では最早知られてゐる存在なのだと言へるだらう。<sup>③</sup>しかしまさに「問ひ」ないし「主題」としてこそ知られてゐるのであれば、その問ひは今新たに答へられなければならない。答へに至るまではその答へは隠されてゐたものであるわけだから、未知の事柄が答へられて行くことになるだらう。すなはち、後者は主題を提示しながら主題として問はれるならばそこで答へられるべきその答へを、今そのやうに答へて行つてゐるのではないかといふことである。しかし後者には、二つ答へが答へられてゐた。一つは誰であり何といふ名の者であるか、そして第二にはその者はどのやうなありやうのものであるかの答へが答へられるのであつた。それらは答へられて行くその順序で前者が「初めてそれを知る」ことであり、後者が「後からそれについて知る」ことであらう。何故なら、答への順序が「私はあの薔薇の花瓶の前に立つてゐる女の兄ですが、メノンと申します」といふその順序になつても依然として「兄なる者」は「初めてそれを知る」者であり、「メノン」とは「兄なる者」がその名前について言へばどの

やうになるかを言ふ「後からそれについて知る」ことであらうから。他方「私は——だ」とは「私は『私が——だ』とも語ることの出来る者なのです」との謂ひでもあらうからして、従って「私」は「——だ」と語られるその条件を握る者でもあるのだからそこで最初に語られることはまさにその条件下で最初に初めて知られることだと見られることになる。何故なら、「私は」と口を開くこととは「私とは何か。私とは——と語る者なのです」といふそのこと自身の端的な表明であらうからだ。それ故、そこには主語を「初めてそれと知って」先づは同定することが、次いでその同定された主語についての他のありやうが語られるといふことがあるのだと言はれるだらう。

## 五

かくて我々は「初めてそれを知る」とは或る一つの条件がその条件として受容され承認されたならそこで語られるその語りに触れることであるのだといふこと、そしてさうしたその語りに触れることはその条件下での一つの同定に立ち会ふことであること、これらのことを認めるに至ったことだらう。そしてまた、「後からそれについて知る」とはその一旦の同定を得たものについて新たための語りを承知することであるとも、我々は理解したことだらうか。しかしながら、「初めてそれを知ること」と「後からそれについて知ること」とに關し右に考察して見たことをもう少し豊かに理解し直すためにも、些かアナクロニズムであるかも知れないが、アリストテレスに拠って同様のことを考へておきたい。

アリストテレスはその『カテゴリアイ』（範疇論）の第二章で「ものごとがある、と語られて行く」場合には四つの場合があるとして、その四つの場合を次の順序で語って行く。<sup>(3)</sup> すなはち――

1. 或るものどもは基底として横たはって行く何らかのものについて自らを語り出すが基底として横たはって行く如何なるものにおいてもあることはないものだとし、例へば「人」は「この或る人」について語り出されては来るが何ものかにおいてあるのではない場合だとする。そして
2. 或るものどもは基底として横たはって行くものにおいてあるのだが基底として横たはって行く如何なるものについても語り出されることはないのだとして、それは例へば「この或る文法術」が「魂」においてあるもののかし基底として横たはって行く如何なるものについても語り出されることはないといふ場合である。そして
3. 或るものどもは基底として横たはって行くものについて語り出され、基底として横たはって行くものにおいてあるのだとする。それは例へば「知識」が基底として横たはって行くものである。「その魂」においてあり、基底として横たはって行くものたる「或る文法術」について語り出される場合である。そして
4. 或るものどもは基底として横たはって行くものにおいてあることも、基底として横たはって行くものについて語り出されることもないのだとし、それは例へば「この或る人」がまさに「ある」とされる場合である。



といふ仕方です。そして右の第四番目のものの「ある」とされるされ方は第五章での「実体」の語られ方においてはおいては

然るに、実体たるものが基本的に、かつまた第一の仕方です、また取り分けて、自らを語り出して行く場合に語られるものがそれなのであり、それは基底として横たはって行く何かについて語り出されることもなく、基底として横たはって行くものにおいてあることもないと考へられるものである。(2a11-13)

とも語られて、明らかに「実体」といふものの「ある」とされるされ方だとされて来る。かうした思索に拠るなら、我々が「初めてそれを知る」こととしたこと、それを同定したこと、これらは実は「実体」の認識であったといふことなのであらうか。つまり我々が条件の承認からのそれとしての語りだとしたことは「実体」が「基本的に」かつまた第一の仕方です、また取り分けて、語られるそのことにも等しいのだといふことであらうか。何故なら、かく「実体」の語りにはそれに先立つ「基底として横たはるもの」などは不要であり、それはただ「基本的に」かつまた第一の仕方です、また取り分けて、語られるといふそれだけがあればよいのだとされてゐるわけだが、かかる語りに該当するのはただ一重に「条件の承認からする語り」でありそれを措いては他にはあるまいとも考へられるからである。かつまた「実体」はさうした語り方で語られて他の「基底として横たはるもの」についても語られることなくそれに

おいてもあることはなく、むしろそれこそが例へば「この或る人間」として「この或る文法術」として「魂」として「基底として横たはるもの」でありながら「人間」がそれについて語られ「知識」がそれにおいてありそれについて語られて来るためのものとなるのだとされるのであった。所謂「実体とは主語とはなれ述語とはならぬものである」といふことでこの事情はあるのでもあらうが、ソクラテスが「ソープロニスコスの息子」といふ条件で、四が「二に二を掛ける」といふ条件で「基本的に・かつまた第一の仕方で・また取り分けて」語られるならば、そこでは我々はそれらを「初めてそれと知る」のでありそこに「同定を見るのであり」そこで世の「実体」に出会ふのであり出会いの後の語りとそれがもたらさう知識とがそれについてでありそれにおいてであるといふその「主語」或いは「基底」（基底として横たはって行くもの）を獲得するのだと、かう考へられてゐるのだとされようか。

## 六

我々はこの論稿の第二章で我々の考察を始めるに当たりその最初に考察すべき課題を「ソクラテスはどんな意味で徳とは何かといふ問ひこそが何よりも先づ先決されねばならぬ問ひだとするか」その意味の解明でこそあるだらうとしたのだが、今や右の今し方の考察からすれば何がしかの結論といふものも得られて来るやうにも思はれる。思ふに、それは「何かがある」のだとされる時とは、それは「基本的に・かつまた第一の仕方で・また取り分けて」語られるといふことからこそその最初の時で先づはあるのではないのかとの確認要求であり、それはさう語られる

その条件の承認の時なのだといふ認識の表明であるのではなからうか。何故なら、ソクラテスのその要求を尤もだとして受け入れた（受け入れるべき必然を、どうであれ納得せざるを得なかった）メノンの先づは持ち出した「徳とはそもそも何なのか」の問いに対する回答が「しかしかが男の徳、しかしかが女の徳、しかしかが子供の、しかしかが年配の者の、しかしかが自由人の、しかしかが奴隷の」といふ風に羅列されてではあるものともかくも回答された時も、それらが形式的に共通に持つてゐる「が」といふ形式とは、言ひ換へるなら、「もしそこに〜といふ条件が満たされるならば」といふその条件の提示を行ふものであるとだけは我々は承認すべきであらうから。メノンに問題なのは、それらの条件の満足によってそれらの徳が語られるのだ、およそ「徳」は色々と語られるのだ、といふことまでは見込まれたものの、徳そのもののその条件の承認と満足とを端的には語るに至つてはゐないといふことであるだらう。ソクラテスの言ひ方に拠るならば、人が蜜蜂の本質を何かと尋ねた場合に蜜蜂には多くの種類があるのだと答へても未だそれは答へではないのだ、「もし〜であればそれが蜜蜂だ」といふ点をこそ答へなければならぬのである。我々が「条件の承認」といふ言葉で考へたところは、次いでソクラテスの考へ進めるところに拠れば、

例えよし沢山にまた様々に徳たるものどもはあるにもせよ、すべては、とまれ、何か或る一つの形をまさしくそれを通じてこそそれらが色々と徳であるその同じものとして持つてゐるのであり、そのものへと眼を遣つた上で答へ手は質問者のために「まさに徳であるもの」を明らかにすることが、まあ立派なことなのだ。(72c6-d1)

といふ風にも言はれることになる。なるほど確かに「四」を語らしめる「二掛ける二」にせよまた「ソクラテス」を語らしめる「ソープロニスコスの息子」にせよ、さうした条件とは「一つの独持の形」を持つその表現としてもまた見直されることを我々もまた承知することだらう。「二掛ける二」も「ソープロニスコスの息子」も形だらうから。

ad rem にはそこまで議論は一挙に進展するであらうが、しかし ad hominem にはさうはかばかしくは行かない。メノンその人との対話の進展に即する限り、メノンは「実体」をそこに語らしめる条件ないし一つの形といふものを「健康」「大きさ」「強さ」などといふものならば自らもよく認め得るとはするのだが、「徳」についてはなかなかないと言ふ。メノンが辛うじてさうした条件ないし或一つの形といふものをそこに承認せざるを得ないのかと思はせられるに至るのは、その外からソクラテスに拠って議論を強制されての上のことであるに過ぎない。すなはち、ソクラテスは「有徳者」とはすぐれた人のことであり、すぐれた人であれば誰であれ正義と節制とを得てこそといふその同じ仕方でのそのやうに同じくすぐれた人であるのだとして行くが、その時メノンもまたさう承知しはするものの、しかしながら、メノンその人にとって「正義と節制を得てこそ」といふそのことはそれによって「すぐれた人」といふものが語られて来るその条件として或いは一つの形としてしっかりと考へられてゐるのかどうか。およそ「基本的に・かつまた第一の仕方でもまた取り分けて」語られることとしての「すぐれた人」とは「正義と節制を得てこそ」とのさういふ条件と形からして語られ得るものと認識されてゐるのかどうか。この点は些か怪しいのではなからうか。

何故なら、ソクラテスによって

すると、すべての人間は同じ仕方でもってすぐれてあるのである。何故なら、同じ物事を得ればこそすぐれた者に彼らはなるのだから。(73c1-3)

と言はれ、また

恐らくは、もしも同じ徳が彼らのものとしてあったのではなかったなら、彼らは同じ仕方でもってはすぐれたあり方ではなかったことだらう。(73c3-4)

と言はれる時に「そのやうです」とまた「確かにさうですね」とも一度は回答するといふのに、さう回答出来るにはその背景ともなつたはずの「条件や形の承認」といふことは何の意味をも持たなかつたかの如く彼に等閑に付せられ、次いでソクラテスに

ではだよ、同じ徳がすべての人のとしてあるのであるからには、言ふことにそして思ひ出すことに努めてくれ

給へ、何としてそれをゴルギアスは主張しかつ君も彼とともに主張するのであったかを。(73668)

と問はれるや否や

ともかくもこれ以外の何でありませう、人々を支配することが出来るといふ以外の。もし苟も、とにかく何か一つのものをごそあなたがすべてのものについて求めてをられるのであれば。(7369-d1)

と答へてしまふ。ここからすると、物事も条件の承認からこそ同定されて語られるのだといふことには一応の意識を持つとは言へ、「人々を支配することが出来るならば」とはそれこそがまさに徳を語らしめる条件なのだとはおおよそ目覚めた意識の下で彼に語られ得たことではないと思はれるだらう。何故なら、メノンの「人々の支配能力の所有」とはさういふことは子供や奴隷については認められるべくもないのかとソクラテスに問はれる時に彼が「二もなくさう承知するのであれば、メノンのさうした回答とは徳を語らしめる条件や形に触れたものだと言ふよりはむしろ人間支配といふ事実、レヴェルにこそ触れるものだったのだと我々には考へられようからである。事実、その点に続く問答においてメノンはソクラテスとともに人々の支配能力が単なる事実としてではなくそこにまさに「徳」をごそ語らしめるに足る条件であれば条件たるにはそれはどう語り直されねばならぬかといふその問答に入らなければ

ならなくなっていくのである。そしてその「人々の支配能力」を「徳」をこそそこに語らしめる条件として仕上げるためには「その中に『正しく』といふことをこそ我々は付け加へるべきであり、『不正に』といふことを付け加へてはならない」(73d7-8)とやれ、そしてしかし「正義」は徳の一部に過ぎず他にも色々徳があるのであれば「徳」を語る条件たるべきその条件そのものの確定において、例へその条件がそこに「徳」といふものを同定することを何か見込んでこそあらうともすでにその「徳」の諸部分といふ複数を我々が見てしまはざるを得ないのだといふことが、そこに確かめられるに至るのである。このことは条件や一つの形を語るといふそのことが何か含む謎に関する問題を我々に示唆するもののやうでもあるが、対話の進行に即する限りではただかうとだけ言はれてゐる。すなはち

またしても、メノン、我々は同じことを蒙ってしまつてゐるよねえ。我々は今度も沢山の徳を発見してしまつてゐるわけだよ、一つの徳を探しながらにもね。先程とは別の仕方においてではあるがね。然るに、その一なる徳、すべてのそれら(徳)を通してある徳、これをば我々は見出すことが出来ないでゐるのだ。(74a7-10)

とだけ言はれてゐる。これに拠れば、意識されてゐることが先づ一つは明らかであらうか。すなはち、それは条件と一つの形からする語りとはそこに同定をこそ見るべきものであると、依然として意識され続けてゐるそのことである。そして、もう一つ、意識されてゐることがあるとされよう。それは「徳とは何か」に対しての最初のメノンの回答が

「徳」を同定すべき条件にして形であるもの自身をただ一つ語るのではなくそれら条件にして形であるものの羅列がそれに代はるのだといふ仕方では「徳」を色々と言るといふことがあったが、さうした「徳」の色々な種類といふ複数ではないその複数の意識である。その点、ソクラテスはただ「先程とは別の仕方では」とだけ言って詳しくは語ってはないのだが、しかし我々にとっては、今し方も見られた如く、「徳」を一つ同定すべき語りの条件にしてその形であるものの確定作業そのものがすでに「徳」の諸々の部分といふ複数を見出してしまふといふ、その問題として意識されるものであった。かうして、要するにメノンその人はソクラテスが「徳とは何か」といふ問いこそが先決問題であるのだとする時には彼はその「徳」を同定すべき語りに条件となるものと語りを与へる一つの形とを求めてゐるのだといふことが、どうもよくは飲み込めないのだといふことだらうか。メノン自身がその点を正直に告白する――

何故なら、それは私がどうも出来ないからですよ、ソクラテス、あなたが求めておいでのやうに一つの徳をすべての徳について把握することが。ちやうど他のものどもにおいては把握出来るやうにはです。

(7a11-b1)

## 七

これは今し方の右の引用にすぐ引き続いてなされるメノンの告白であり、それ故、我々がさう見てゐる如く、その



告白とは「徳」を同定すべき語りの条件にして形であるものの存在の理解にこそ及ぶものであることは明らかだらう。対話の進行するところ、ソクラテスその人がかかる存在の理解を導くべく道筋を示して行くことが我々には見られることにもなっている。その次第はと言へば、簡略に次のやうに纏めることが出来るだらうか。

1. 一つの徳を求めたはずなのに「正義・勇気・節制・智慧」等々、数々の徳を見てしまった。「形」についても「色」についても或いは「円・直線・・・・」と或いは「白・黒・・・・」と数々のそれらを見ることがあるだらう。
2. しかしながら、「形とは何か」「色とは何か」といふその問ひとはそれら数々の部分でもっては答へられてはならないものであらう。何故か。
3. 何故なら、全体が問はれてゐる時に部分をもって答へようと試みるのならば、どの部分も等しく答へられねばならぬ。だがさうすると、答へは必然的に諸々の部分をといふ複数の回答ともなってしまう。しかしながら、
4. 肝要なのは、問題が「形」といふことならば、それら諸部分も一つの「形」といふ名前により呼ばれずべては等しく形でありその形こそがそれらを含んでゐるのだといふ時、その時に我々の念頭にあるものこそである。
5. それはまた、換言すれば、色々の事例のすべての共通する同一のものとも言へるものである。
6. さてしかし、我々は回答するに当ってはそこで用ゐられる言葉が回答を理解する者にとって理解不能のものを含むものであってはならないと、問答法の約束に従って心得るべきである。

7. さうした心得に立って今「形とは何か」を答へてみれば「そこへと立体が限界づけを持つに至るもの、それが「形」である。まさにそれを纏めた上で「立体の限界が形である」といふことになる。

かうした次第によりソクラテスは「徳」を同定すべき語りの条件にして形であるものの存在の理解に道筋をつけ、

さあ、君もまた僕に約束を果たすやう試みてくれ給へ、全体についてこそ、徳についてはそれが何であるかを言った上で。そして多を一から作るのによして貰ひたい。・・・中略・・・いや、それを全体としてかつ無傷のままに残しながら何として徳はあるのかを言つて貰ひたい。(77a5-9)

と言つては「徳」を同定すべき語りにその条件となり形ともなるものがあり方を語るやうに求めることになる。

今や殆ど完璧であらう同定すべきものを語り得る条件にして形であるもののそのモデルが与へられたやうである。我々としては「二掛ける二」であれ「ソープロニスコスの子」であれ、そのやうな簡単なものでも差し当たつては語るべき「四」や「ソクラテス」を語る条件にして形であらうともなしたのであったが、「形」といふものをこそ語るにはそれだけの精錬も必要ではあるだらうか。ともあれ、しかしメノンその人は、ソクラテスがモデルとして示したものに従つて、「徳」を同定すべきその条件にして形であらうものをこれから新たに語らねばならないわけである。

右のやうに導かれたそこからメノンが「徳とは何であるか」といふ問いに対して答へるその答へは

ではですね、私には思はれるのですよ、ソクラテス、徳とは、ちやうど彼の詩人が語る如く、美しいもろもろに喜びを持ちかつ力があることであるのだ、と。この私もまた次のことを徳として語ります。すなはち、美しいもろもろを欲求しつつもそれらを獲得するに力があることだ、と。(77b2-5)

といふ風に新たに語られることになる。しかしながら、この新たな回答も一つおよそ人間にその欲求たるべきものは一義的に「善きもの」でこそあらうといふことが議論を通じて確認される。すると「徳」を語るべきその余地は欲求の対象にはなくむしろ獲得能力といふそのことでこそ決られることになるだらうといふことになる。ではその能力の發揮とは如何にしてあり得ることかと問へば、それはまたしても「そこにもし徳の部分が伴ふなら」といふことで答へられる他にはあり得ないだらうとされるに至る。これを要するに、

されば帰結してゐるわけなのだ、君の同意することどもからしてね。すなはち、徳の部分とともに、何を人が行為するにもせよ、行為すること、これが徳であることが。(79b4-5)

といふわけである。だとすれば、問答者らが問答中の未知の言葉の使用を問答法が禁止することを心得る限り

それだつだよ、すぐれた君よ、君もまた徳が全体としてそれは何であるのかと探求されつつあるその時には、  
思つてはいけないのだよ、そのもろもろの部分を通じて答へながらそれを誰にであれ明らかにすることを。

(79d6-8)

とメノンが批評されることも必至であることにもなるだらう。

## 八

しかしながら、ソクラテスの指摘することはどれだけのことだらうか。一方では確かに、それは大方明らかである  
とされてよいことだらう。何故なら、それは「徳といふ全体が未知である時はその部分もまた未知であるはずなのに、  
その未知なる部分先取りして既知でもあるかの如く見做して同様に未知である徳を明らかにしようとすることは、  
論理上、論点先取の誤謬をなすものである」といふものであらうからだ。成程、例へばロゼッタ・ストーン  
の解説に努めたシャムポリオンにとっては神聖文字による碑文であれ民衆文字によるそれであれそれらが未解説であることと  
その碑文の含む単語や碑文を一つの文章たらしめてゐるシュンタククスやが未知であることは、確かにまさに同時

のことであるだらう。そして、例へ一つの単語がそれとしての限りで知られたにもせよ、それはただ部分たらんともしてゐるその断片の意味に留まるべきものであって、未だ全体の部分だといふその資格には届かずにあるのだと考へられようから。例を変へて「光りの三原色」といふ場合であっても同じ事情であらう。つまり、例へ個別に赤・緑・青といふそれらの色を知つてゐるとしてもただそれだけでは「光りの三原色」を成り立たせてゐる部分としての認識の意味には達してはゐないのだとされるべきであらう。すなはち、「光りの三原色」といふ全体の未知とはまさしく同時にその部分たる赤・緑・青の未知ではないかといふことである。かうしてソクラテスの全体―部分の同時成立と同時に不成立といふ認識に鑑みて右の如く論点先取の誤謬を指摘することには、成程、一応の理由はあるのだと我々も認めなくてはならないだらう。

とは言へ、それはそれでよいとしても、その指摘に至るまでに対話者たちが交はして来たその問答に鑑みてもなほソクラテスのその指摘は有効だと見做されるべきものだらうか。何故なら、それまでも「徳」の部分といふことに絡んではすでに何らか議論がなされてゐて、それらは何か別の光りを我々にもたらしてゐるものやうにも思はれるからである。すなはち、その一つの議論はメノンその人が「健康」や「大きさ」や「強さ」といふことならばそこに一つの同じ〈すがた〉（エイドス）を認めることが出来るのにと「徳」といふことになるそれがなかなかののだとした時ソクラテスはその認識へとそのメノンを誘つた、先に六章で見た議論である。詳しく議論を再掲すると――

1. メノン、男の徳とはポリスをよく治めることが、女の徳とは家をよく斉へることが、それだとしてゐた。
2. だが、ポリスにせよ家にせよ何にせよ、節制に適ひ正義に適ふその仕方では治め齊へてこそ、よく治め齊へ得るのだ。
3. さればそれらの「適つてこそ」とは「正義と節制とをもってこそ」といふことではないのか。
4. では、女も男も子供も年寄りも彼らがすぐれてあらんとすれば彼らはすべて同じもの、すなはち「正義」と「節制」とを必要とするからには、「すべての人間は同じ仕方ではすぐれてゐる、何故なら、同じものを得てこそすぐれた者となるのだから」と言はれてよい。そして、かう駄目を押されてもよい。すなはち、
5. 右の「同じ仕方ではこそ」と言へるのも、それは同じ徳がすべての人の徳なのだといふことがあるからだ、と。

これらの議論に拠れば、我々がこれまでの我々の議論を通じ「条件と一つの形の確認とは同定に至ることである」として来たことがほぼそっくりそのまま見られるのだと実は言はれよう。何故なら、右の「同定」といふそのためにこそ、条件といふのも一つの形といふのもまさにそれらであるのだらうから。しかしさうすると、ここでは「正義」と言ひ「節制」と言ひ、それらは我々に「同じ仕方では」と認識させるそれだけの認識をもたらす既知のあり方であるのだといふことがすでに見られるのではなからうか。メノンその人は、成程確かに「徳」の多くの種類を挙げるものがそのまま「徳」そのものの認識であり得るだらうとはした。唯それらが見出されるどの一つの場合においても「しかじかの条件があればそれが徳である」といふことを確認しなかつただけのことである。だがしかし、もしその

確証をかうしてソクラテスとともに与へるにも至ったのであれば、この時にはメノンもまた「徳」を語り得たのだと我々にされてはいけないのだろうか。無論、先の我々の六章の考察ではこの可能性については我々は否定的に考へたのではあったが。従って、さうしたメノンを除く議論そのものといふことで考へるなら、「正義」や「節制」といふ「徳」の部分も一つの徳を同定すべき条件を握るものとして最早知られてゐたのだとされてもよいのではなからうか。そして、これも先の同じ六章ですで見たとした議論ではあるが、要するに或る語り方を「徳」をこそ語るべきそれだとするにはそこに「正しく・不正にはなく」といふことを付加しなくてはならぬ。とすれば、その付加する「正義」といふ徳の部分とともにその他「勇氣」「節制」「智慧」「度量の大きさ」等の諸々の徳をも併せて見出しながらに語ることになる。語るべきが「同一の徳」であるといふのにその諸部分を見つつ語らざるを得ぬといふことは、「同一の徳」を語ることを成功させてゐるかとの問題があった。その点に関するソクラテスの評価は何やら定かではないやうにも見受けられるが、これも先に見られた如く、メノンその人には「徳の諸部分」があることと「全体的に一つの徳」があることとはそのままに放つて置かれることとなり、事実上は、これも先に引いた「一つの徳を見る」ことの自らの無能の告白といふことでそこは収められてしまひ、以下ソクラテスによる「形」を語る条件の語り方の教示へと続いて行くだけとなったのだ。しかしながら、さうしたメノンは差し置いて問題を我々自身の手元へと引きつけて見よう。さうすると、まさに「全体―部分」とは同時成立すべきものであったといふその限りでは「徳」の諸部分がもし確定されたとするならば、それと同時に「徳」の全体もまた知られるといふことにもなったとされて

よいのではないだらうか。すなはち、「徳」とは何か。「勇氣」「節制」「智慧」「度量の大きさ」等の諸部分からなるその全体であると、かう我々は言ってもよいのではないか。とすれば、またしても「徳」が未だ探求中ならその部分もまた未知であるとは、最早端的には言へなくなってしまうのではなからうか。

## 九

かくてソクラテスがただ単に「全体―部分」は同時成立かもしくは同時不成立だといふその限りで未だ探求の中にあつて未知なる「徳」はその部分もまた未知なのだとしてその未知なるものを既知扱ひする論点先取を戒めたのなら、それはそれでよからう。だが議論は思はぬ仕方でその「徳」の足跡をすでに踏んで行つたといふこともあつたのではないか。我々としてはかう考へようといふ次第であつた。しかしそれならば、ソクラテスのただその論点先取の誤謬の指摘によってだけで問答の展開が図られようとしてゐるその理由とはいつたい何なのか。このことが問はれることであらう。しかし、我々としてはその答へを「ソクラテスは同時不成立といふことでは『全体―部分』といふことを事實使つた、それは『未知の徳』こそその探求のひたすらの純粹に鑑みて。だがしかし、同時成立といふことでは使ふつもりにはなれなかつた。彼はその『一つの徳』とは『形とは何か』についての答へ方と同じく部分（構成要素）を数へ挙げるのではない端的な一つの形式でこそ答へらるべきものだけ考へたのだ」といふことで考へてみるより他ないのでないだらうか。何故なら、對話の事実上の展開に従ふ限り、ソクラテスたちは對話の焦点をただひたすら



「徳」といふものがソクラテスに願はしいその端的な形式の探求といふことだけから探求されれば所詮はその探求は行き詰まるのであれば我々には未知なるものの探求といふそのことだけしか残らぬではないかといふ、ただその一点にこそ、合はせてしまふそのことが見られるのだから。

我々が右のやうに考へることが許されるのだとすれば、我々はこの論稿の最初に我々の考察すべき第二の問題だとした問題、すなはち「メノンの探求のアポリアの提出にはどれだけの理由があるとされるか」といふその問題に今は回答する余地も生まれて来たと考へることが出来るだらうか。何故なら、我々が「初めてそれを知る」こととした「条件と一つの形の承認」であり「基本的かつ第一のかつ取り分けての語り」であるものが今やメノンには一切その成立を奪はれてしまひ、そこで彼に突き付けられてゐるのはただひたすらに「未知なるものの探求」といふその一事であるからである。「二二が」といふ条件ならばそこに「四」を「ソープロニスコスの子」といふ条件ならばそこに「ソクラテス」を語り得るのであり、また他方「立体の限界」といふ条件ならばそこに「形」を語り得るのである。だがメノンその人には彼が最初に「よくポリスを治めるならばそこに男の徳が、よく家を斉へるならばそこに女の徳が」と安んじて思つてゐた気楽さは奪はれ、とどの詰まりは「もしもかうならばそれが」といふその条件の一切の語り方を否定されてしまったのであった。とするなら、彼に残されてゐるのは最早「条件の承認によって」といふのではなく「未知なるもの」をただ裸のままに「未知なるもの」として探求するといふそのことだけしかないのではないだらうか。メノンの「探求のアポリア」とはロジックそれ自体としては或いは例へば『メノン』篇の

所謂冒頭にいきなりぶっきらぼうに提出されてもそれはそれで面白可笑しく取り組まれるかも知れぬものであるといふのに、いったい、何故今ここでこそメノンその人の言葉ともなったのであるか。その点を我々が考慮して見るならば、それは問答のさうした必然によってこそであることが、我々にも十二分に首肯けるのではないだらうか。

彼の言ひ分を聞かう。

また、いったいどんな仕方であなは探求なさるのですか、ソクラテス、あなたが全くもってそれが何であるのか知ってはをられないそのものを。何故なら、どういったものをあなたの御存じないものの中から先に立てて、あなたは探求なさるのでせうか。或いは、よしんばまた精々あなたがそのものにぶち当たられたとしてみても、如何にしてあなたはお知りになられるといふのでせう、そのものはまさしくあなたが御存じなかったものであるのだ、と。(80d5-8)

世に所謂ソフィズム(詭弁)とも見られようこの言ひ分も追ひ込まれた彼メノンの立場を反映して何と見事に我々の所謂「初めてそれを知る」といふことが持つとしたそのロジックを逆証してゐることであらう。何故なら、我々が見るからである、「何々が語られるべきものを語る条件を握ってゐる」「何々がそれを語らしめるその条件である」「何々が基本的にかつ第一の仕方であつた取り分けて語られるならばそれはまさにそれであると言はれるものである」

といった場合のその「何々が」といふものは、我々が全き無知の海の最中を泳いでゐるだけでは生じやうがないではないかとされてゐるのを。ペーネロペイアは二十年間、夫オデュッセウスの帰国を待ち侘び再会を恋ふてゐる。言ひ換へれば失つてゐたものを取り戻し或いは探し求めなければならないのであるが、その彼女も全き無知の中にだけで生きてゐるのではなく、よもやと疑ふ乞食姿の老人をそれは本当にオデュッセウスなのか、さう語り得るだけの条件を持つ者なのかと、再認のあの名高い三つの場面を経るのであった。つまり、メノンの言ふ「先に立てて探求する」といふことをするのであった。これを逆に言ふなら、「探求することとはそれこそが探求さるべきものをそれとして探求させそれこそが探求してゐたものだと言はしめるその条件との交渉に入ることである」とも言へるであらうか。我々は先に（五頁）「メノンを未知であるとは、先づはメノンその人を語らしめる条件と没交渉であつた時のことであり次いでは交渉を持つに至つてもその条件を承認しない時のことだ」とも言つてゐたのだが、「知らぬもの」とは「まさに知らぬものども」の中にあつて遂に「どのやうなものとしても先に立ててそれを探求の対象として探求することは叶へることのないもの」でありその意味で引いてはさうした対象として探求の条件としては没交渉でしかあり得ないものといふことになるのではないか。そして、我々もまた銘記すべきはメノンのこの「探求のアポリア」といふものも我々がそれとは全くもつて没交渉で知るところのなかつたものは探せないのだとは言つてゐるもの、「探す」といふそのこと自身があり得ないのだとは決して言つてはゐないと言ふことであらう。否、むしろ「探す」ことは我々が探し得るその条件と交渉を持つたその上でのことだと言つてゐることだらう。それ故、我々はメノンの

この「探求のアポリア」の提出の仕方とは一重に彼がソクラテスとの間で持ったその問答を通じて「徳」を語るべきその条件を一切奪はれてしまつてただ全く「知らぬ徳の探求」といふ裸の事実だけを胸に抱かされ「探求の条件」を恋ふたその時のその「探求の条件」の恋しさにこそ、自らを抛りかからせる体のものだと見做すべきものだらう。その点、メノンのその「探求のアポリア」をパラフレイズするソクラテスの語り方の方こそがもっと醒めたものとも我々に見えるのではなからうか。何故なら、ソクラテスの力点はメノンのやうに「探求を認めるがゆゑに探求の条件の成立を恋しがる」といふやうな切ない思ひに迫られたものではなく、むしろただ「探求がないこととはその条件もないことだ」といふそのロジックを整理することだけに置かれてゐるものだとも見られるのだから。

## 十

ソクラテスによりもむしろもっとメノンの心情の方に同情的な我々のかかる解釈に抛るとすれば、メノンの趣旨は「知らぬもの」は探求の成否の判定に必要な同定を得させない、すなはち、同定を得させるその条件を与へ得ない、つまりは、例へよし探求は試みられてゐるにもせよそれが単に「知らぬもの」としてだけで考へられてゐるその限りでは所詮はその探求も不可能なのだといふことを言ふにあって、それ故、単なる「知らぬもの」の形での探求のその限界を突き詰めることにこそあるのだとも理解されて来るだらうか。それ故、もしもその「知らぬもの」もなほ探求されねばならないのだとしたら、まさに探求され得る形の「知らぬもの」としてこそ考へ直されなくてはならぬこと

にもなるだらう。それは、見られたやうに、「徳」を探求するその条件を一切奪はれたメノンその人の探求条件への切ない恋でもあったかとも我々はするのであるが、どういふことか、その「知らぬもの」の考へ直しは、対話の展開に拠る限りでは、そのメノンに拠ってではなくむしろソクラテスその人のすることとなってゐるのを我々は知らなくてはならないのである。さうした事情の一端の理由はもしかするとソクラテスのメノンの「探求のアポリア」をパラフレイズして探求の不必要と不可能とを冷静に取り出して見せるその冷静といふことにあるのかも知れぬが、そこはともあれ、ソクラテスは次のやうにその「知らぬもの」の考へ直しを自ら進んで遣つて見せてゐる。すなはち、その骨子は——「知らぬもの」ももしそれがなほ「探求されるべきもの」であるとすれば、我々がその持ちものを失つて探すその時のやうに、一旦はその知識を獲得したが獲得したその知識を何かしら失つてしまった、その「知つてゐたもの」も今では「知らぬもの」となしてしまった、すなはち、その知識が取り戻されねばならぬ「探しもの」としてしまった、だからその知識を探して取り戻し、もう一度「知つてゐるもの」にし直すのだ——と、かういふところにあると言へようか。すなはち、ソクラテスは探求の不必要と不可能とを言ひ立てる論争家好みのさうした議論といふものも反駁は可能なのだとして、自分は男たちや女たちの神的な事柄をめぐる智慧ある人々からして真実で美しい話しを耳にしたことがあるのだ、彼らは人間の魂の不死を説いたのだつたと言ひながら

されば、魂は不死にして幾度も生まれ出たのであり、またこの地のものどももハデスにあるものどももすべて

の事柄を見てしまつてゐるのであれば、魂が学んでしまつてはゐないといふことはあり得ないのである。かくてまた何一つ驚くべきことではないのである、「徳」についても他の諸々のものについても魂が想起することが出来ることは、それらともかくも以前にも魂が知つてをったものについてなら。何故なら、自然本性はすべて同族であり魂はすべて一切を学んでしまつてゐるのであれば、何ら差し支へないのである、ただ一つだけ进行した上で——このことをこそ学習である、と人々は呼んでゐるのではあるが——他のすべてを彼が発見する、そのことは。もしも人が勇氣があつて探求しつゝも降参するといったやうなことがないとすればである。何故なら、探求すること、学ぶこととは、かうして見ると、想起として全体はあるからだ。(81c5-d15)

といふ風に、「知らぬもの」の探求、さるべきものとしての考へ直しを示すのであった。

今や、我々がこの論稿の始めにそれらを我々の検討課題としたその第三番目の課題の検討が待たれることとなつたであらうか。すなはち、我々はそこで「想起の説はメノンの探求のアポリアの申し立てを十二分に克服して、やはり『徳とは何か』の問ひは依然として先決問題たるを得よう」とも見込んでをったのだが、その見込みはこの今に十分に見られるものなのか、その最後の問ひである。さて、我々がそれが骨子かともしたこと、すなはち「その所有してゐた知識を失つて知らぬものとしてしてしまつたものその知識の取り戻しと探し出し」といふことで「知らぬ

もの」の探求のあり得ることを主張すること、このことだけは差し当たってともかくも我々にも承認されるだらうか。およそ人の世に「探しものをする」といふことがさうした構造においてあることは何ら否定すべくもなくあり得ることでもあらうから。ちやうど先程我々がペーネロペイアの夫探しにその例をば見てゐたやうに、彼女はその親しく馴れ知つてゐたオデュッセウスを二十年の歳月の中にあたかも見失つてしまつたかのやうであり、それ故に確かめてこそ再会を果たさなければならぬのであつた。「探す」といふことは確かにさういふことである。しかしながら、オデュッセウスを知りオデュッセウスを失ひオデュッセウスを探し出すのと全く同様に「知識」を知ること「知識」を失ふこと「知識」を探し出すこととは語り得るものなのかどうか、答へがどうでも検討する必要はあるだらうか。それには先づ、我々の所謂ソクラテスの右の「考へ直し」はどれだけのことを言ふものであるのか、そこを確認しておく必要があるだらうか。以下のことが確認されるだらう。すなはち

1. 魂の不死と幾度もの誕生、そしてそれ故の全存在の目撃と学び
2. 以前に知つてゐたものの想起の当然
3. 想起の当然の理由づけ・・・自然本性の同族と一切の学びの成立との上では、一の想起と学びとは他の一切の発見をももたらす。
4. 総括して・・・探求と学習とは、その全体は想起である。

といったことも主張されてゐることを、我々は確認するであらう。そしてまたこれらの確認はもっと短く「不死なる我々の魂は不死の生の中に全存在を目撃し学んだ。然るに、その全存在の自然本性は同族である。それ故、一の想起は他の一切の発見でもある。かかる探求と学習は全体として想起である」とも纏められるだらうか。とは言へ、我々はこれまで散々我々の所謂「初めてそれを知る」ことをめぐっては「それは条件承認である」とか「一つの形の確認からのことである」とか「何かがかつ第一の仕方でもた取り分けて語られることであり、を見ることである」とか苦勞しつつ何とか言つて来たのだったが、ここでは全く端的に「すべての事柄を見る」すなはち「目撃」といふことでもって済まされてゐて何の躊躇ふところもないのを、我々は知らなければならぬのである。成程、我々も「　が」である」といふ時にはその「　が」とは「　である」と語ることとその条件ともなつてゐるのだと考へるのだから我々の不死なる魂が万有を目撃するのも恐らくは「それが何々」「それが何々」といふ仕方でこそ行はれるであらうからして、そこには我々の考へるところと同じく「条件の承認」といふことはあるのだとされるのかも知れない。またその「条件の承認」とはかつてあの世で目撃して学んだものをこの世で思ひ出すその時にもその思ひ出しにとつての同じその条件ともなるのだとされるのかも知れない。しかしながら、我々は右の引用文を読むに当たつてはよく注意しなければならぬのではないか。何故なら、注意すれば顕著なやうに、我々の場合の物事の同定の語りの場合には「その条件を与へられて受容の如何を判断した上で」であるところが、前世の我々の魂の存在同定の場合にはすべて「見てしまつてゐる」「学んでしまつてゐる」といふその（現在）完了形のことだと語られてゐるからである。これだ



と「条件の承認」などと言っても恐らくは条件を承認する側の判断などは期待されるところはないのかも知れない。何故なら、我々は先に（六頁）「私は——だ」とは「私は『私が——だ』と語ることの出来る者なのです」との謂ひではないかともしたのであったが、我々の魂の前世における知識の獲得とはそのやうな自己紹介を全存在から我々の魂がなされたことのやうにも見られるからである。確かに彼の『パイドロス』篇においても、然るに、『美』はその時に輝いてあった、見るに燦然と” (250b5-6) といった仕方で語られてゐるがそれはあたかも我々には『美』といふ真実在からの自己紹介を受けてゐることでもあるかとの理解も可能であらうか。そしてまた全存在が我々に「これがこれ」「これがこれ」といふ知識を与へてしまふといふことは、そこが全存在の自己紹介の場でもあったこととも思はせるのではなからうか。かつ「初めてそれを知る」ことの典型としてこそ「自己紹介」といふものもあつたかと、気がつけば我々もまた思ひ返すであらうか。「条件や一つの形の受容からその同定へ」といふことであればその受容の如何は我々の判断をこそ待つものともなるだらうが、見られたやうに、「自己紹介」はまさにその形で自己を紹介するその自己紹介をする者にこそ資格と権利とがあることは、最早、およそは我々の常識でもあるだらう。

## 十一

「〜とは何か」といふ問ひは「—が—である」といふ仕方です。「—が」といふその「〜である」ことを語る条件をば持つものを答へることで満足させられるだらうその時、我々の魂の前世における学びは全存在の「私が何々である」

「私が何々である」といふ自己紹介のすべてを学んだことも理解されようかと、かう差当って考へて見たのだった。自己紹介である限りは「―が」と言ってもそれは我々の納得に待つものであるよりは我々はただ承認するのみであるといふ点で、さうした前世の知識とは先験的なもののだとも見られるだらうか。それはともあれ右の「考へ直し」においては「探すこと」の構造の一端を本質的になすだらう「失ふこと・失ひ」といふことへの言及が何一つ見られないことの意味は、考へてみれば当たり前にも過ぎないことかもしれないが一応確認しておくことが有益であらうか。それはかういふことであらう——「失った」とは「失ひそれ自身」によって語られ得ることではなくて、否「それを探さなくてはならない」といふ意識の顕在化を待つてそこでこそ初めて語られるにも至るのではないか。どんな形にせよ気づかれてゐるならばその気づきは「失ひ」と両立することはなく、「失ひ」とは意識のどんな気づきの形への登場でもないものの謂ひであらう。例へば「眼鏡は何処だ、眼鏡がない」と探し求めの対象になって、その時にこそ、「それがなくなった」と眼鏡は失ひの条件として主語ともなるのではないかといふことである——それ故、「失ひ」とはあくまでもこの世での「探し求め」でこそ主題化されることであつて「前世における我々の魂の全存在の目撃」などといったやうな如何なるミュートスでもつてしても語られ得ないことなのだと思されるだらう。

だがしかし、我々の所謂「考へ直し」がなほ「我々がこの世で想起するのは当然のことだ、それには理由がある」と語つてゐること、そしてその説が「探求のアポリア」を十二分に克服するだらう点についてはソクラテスがメノンの召使ひの少年において「想起」の実例を示して行く問答の展開とともに見るより他はないだらうし、またさうする

ことが適切であるやうにも思はれる。従つて、目下の考察は次稿へ続くものとして中途で止まるといふことになる。

【註】

(1) 先にもまた言ふことになるがこの点は或いは端的にかうも言ひ直されよう。すなはち——我々には「はは？」と主題を立てて問ひその答へを待つといふことが普段にあるのだけれども、しかしこの問答するといふそのことも先づは答へ手に他ならぬその問ひをこそ答へようとするその問ひの意味するところが理解され知られてゐなくてはならぬのである。つまり一つの主題を立てて問ひそこから今一つ別の未知の知識を求めるのにもそのこと、新たな知識が今問はれてゐるのだとのその点の先立、知識が先づなくてはならぬといふことだ(例へば「お父さんは？」と学校から帰つて来た子供に尋ねられた母親は子供が今のそのあり方を知りたがってゐるその「お父さん」の何者であるかの知識は至極当然にも知ってゐなくてはならずまた子供も知ってゐるものと信じてゐてこそ安心してさう尋ねてゐるといふ例である。知ってゐるものを知ってゐる者同士であるからこそ問答し合へるのである)。

(2) 差当つて我々は「初めてそれを知る」といふことを我々が自己紹介の場で「私がメノンです」といふその自己紹介さへも受容するといふ場合で考へてゐるわけであるが、三点注意しておきたい。

イ、自己紹介の場とは或る意味では特権的な場だとも言へるであらうこと。何故なら、それが自己紹介の場

もあれば「私はメノンです」とこそ言ふのが定法だから「私がメノンです」と言ふ形の自己紹介は一応は変則的だから異様とはされるもののそれでも一応場所が場所だけに受容はされる。だがそれが刑事事件での取調べの場所でもあれば犯人を庇って自首して来たのだと目星をつけられた人物は例へ「私がやりました。私が犯人のメノンです」と主張しても、おいそれとはその主張は受入れられないだらうから。つまり、述語の主語への帰属をこそ主張するその「〜が〜です」といふ主張一般も総じて本質的に問題的存在である時に問題が解かれる解かれ方に難易といふことがあり、自己紹介の場での「私が〜です」の「私が」は多分比較的容易に解かれるであらうが、すべての場がさうだといふわけでもないといふことである。

ロ、自己紹介は通常は「私がメノンです」といふ助詞「〜が」を使った形においてではなく「私はメノンです」といふ助詞「〜は」を使った形でこそ行はれるだらう。何故なら、右の註の如く自己紹介の場が今「〜です」といふ名乗りの新たな知識をもたらさうといふときその新たな知識がそれにこそかかるその主題は既知であるのでなければならぬが、その既知であることはそこがまさに自己紹介の場でもあれば「私は」といふことなら端的に担保されるけれども「私が」といふことでは端的には担保されないからである。「メノンである」ことその帰属が「私が」といふことで主張されてゐることまではそのまま了解されようが、その受容は即座ではなからうからである。さうだとすると

ハ、「私はメノンです」といふ自己紹介の場における自己紹介の受容とは、実は「私は『私がメノンである』

と名乗るその資格のある者です」といふ主張のその受容の謂ひではないかとも今や考へられるだらう。

(3) 既に右の註(1)で述べたことではあるが、敢へて再言すれば、小学校での $5+7=$ ( )、 $8\times 9=$ ( )といった宿題も生徒がそれらを答へて( )を埋めるのにも $\parallel$ の前で問はれてゐるその演算形式を理解しなくてはならない。宿題を出す教師もその演算形式の意味を既に教へてゐて、通常、生徒のその心得を期待するのである。

(4) 註(2)のハで見たことである。

(5) 『カテゴリアイ』1a16-1b9

(6)  $\mu\upsilon\upsilon\tau\omicron\upsilon\tau\omicron\upsilon\tau\omicron$ ブラック (R. S. Bluck, Plato's Meno, Cambridge, 1964, pp. 224-225) やシャープルズ (PLATO

MENO, R. W. Sharples, ARIS&PHILLIPS, 1991, p. 127) などは「面のイデアとかエイドスとかの思索はまだ

多なるものから離れたかたち (*eîōn paxōā yā toîkla*)<sup>2</sup>、といったことを示唆するものではないことに我々の注

意を促してゐて、ブラックはここでのエイドスは a standard of reference といふ線で理解されるべきことを強

調するのであるが、後期のエイドス観との区別への留意といったことも然ることながら問題はまさしくその「言

及の標準」といふそのことにこそあるだらう。そのことを深く検討してみれば、或いはもしかすると最初の入り

口での考へ方の相違や区別の存在にも関はず究極的には同じエイドスこそが考へられて行くといふこともある

かも知れない。

## 内容目次

八一四

### 一、前書き

二、最初の問題・・・先決問題の争ひ、それ故検討すべき問題の三つ

1. ソクラテスの「徳とは何か」の問ひをこそ先決問題だとするその意味とは？

2. 「探求のアポリア」をメノンが提出するに足る理由とは？

3. 「想起の説」は「探求のアポリア」を克服するか？

三、色々と「知る」ことにも「初めて知る」ことと「後からまたそれについて知る」といふことの順序があること

自明と前者の「徳」についての困難といふ問題

四、「初めてそれを知る」ことと「後からそれについて知る」ことと

1. 「初めてそれを知る」⇨条件の受容、条件を握るもの⇨事柄を語らせ得るもの

2. 「後からそれについて知る」⇨同定とその他のありやうの語り

五、アリストテレス『カテゴリー』による傍証

1. 四の考察の確認とアリストテレスの傍証の求めへと

2. 傍証・・・「初めてそれを知る」⇨「実体」の基本的に・第一の仕方で・取り分けて語られることへの触れ

六、ソクラテスの先決⇨「ある」とは「実体」の基本的等々の語られ方の先行性にして「条件」の承認のことである

こと、そしてその点のメノンの不安定

1. ソクラテスの先決性とは「実体」の語られ方の基本性にして「条件」の承認による初めての知識のこと  
2. 先決性を決めるべき「形」の承認へのメノンの不馴れと不安定

七、ソクラテスの「形」の承認への誘導と誘導されて「徳」を定義する定義の論点先取

1. 「形」の承認へのソクラテスの誘導  
2. 誘導されて「徳」を定義する定義の中で論点先取

八、ソクラテスの論点先取の指摘に容認し得るものとそれに食み出るもの

1. ソクラテスの論点先取において容認さるべきもの・・・「全体―部分」の同時不成立  
2. 「徳」の部分を経た議論の確認

3. メノンはいざ、議論そのものとしては「正義」「節制」といふ「徳」の部分を「徳」の同定の条件としたこと  
4. 「徳」の諸部分の確定を通じて「徳」といふ全体も同定されてはゐなかったか。

九、ただ「論点先取」だけしか残されないとは

1. ソクラテスの論点先取の誤謬の指摘のみで対話が展開させられる理由——「未知なるもの」への焦点の絞り  
2. 「探求のアポリア」のここでの提出理由——メノンにはただ「未知なるもの」だけの探求のみが残された。  
3. 「探求のアポリア」において逆証される「はじめてそれを知る」ことのロジック、探求条件への恋

十、「知らぬもの」の考へ直しと全存在の自己紹介による前世での知識の成立

1. メノンの「知らぬもの」もなほ探求さるべきならばその「探求されるべき知らぬもの」を考へ直すべき要求と、ソクラテスによるその考へ直し

2. 「想起の説」の回答するもの——「探しもの」としての知らぬもの、前世で我々の魂が獲得する知識のあり方、すなはち、全存在の「自己紹介」による獲得といふこと

十一、望見されるもの

1. 前世の知識の先験性と「失ひ」への言及のない理由と

2. 「想起説」の全体的な検討はその実演とともにこそなされようこと